海蝶ノヘイ 5

吉川英梨

羽田特殊救難基地長とドキドキの対面

「海上保安友の会理事の、吉川です!!」

用件を聞かれ、私は緊張しながら初めての肩書で名乗りました。いつもは「作家の吉川英梨です」とか、「○○の母です」とか「○○の妻です」とか。『理事』という言葉の響きに、我ながら聞きほれてしまいます。

昨年３月６日、いよいよ、海上保安友の会の理事会に初参加の日です。この日、理事会の承認を得て、いよいよ理事デビューという記念すべき一日のはずでした。

ところが……。

向かった先の横浜海上防災基地のはずのその場所には、第三種制服姿の海上保安官の方が１人いるのみ。「理事……？」と訝し気に私を見るばかりです。

「ええっと、今日、海上保安友の会の理事会があると聞いて、伺ったのですが……」

「ここは、工作船資料館ですが」

というわけで、私は５分ほど遅れて現場入りです。すでに新理事になられる４名の方が別室におられました。吉川、痛恨の初日遅刻です。冷や汗が収まるころ、とうとう理事会の会場に呼ばれました。現職理事の方々の隣に案内され、ふと前を見ると、ずらっとスーツ姿、制服姿の海上保安庁幹部の方々が揃っています。

最前列の中央に座っておられるのは、当時の岩並秀一海上保安庁長官。他、肩や袖口に金色のモールがたくさん入っている人々ばかりです。正直、大作家の石田衣良先生や今野敏先生とお会いした時よりも緊張してしまい、心臓がひっくり返りそうです。

そんな中、自己紹介を促されました。小説家などという普段人と会わない、しゃべらない生活をしている私、人前で話すのが大の苦手です。他の理事の方々はスマートに、時に笑いを交えて自己紹介していきます。

（どうしよう、なに言おう、ちょっとは笑いを取らなきゃだめかしら）

悶々としている間に、順番が回ってきてしまいました。

拙著『新東京水上警察』の既刊４冊を持ってきていたので、この本がご縁で理事に呼ばれたことを自己紹介のネタにすることにしました。

この本は警視庁の話であり、海上保安庁が出てくるのは、４冊目の『海底の道化師』のみです。以前もこの欄で触れましたが、私はこの本で特殊救難隊のヘリを墜落させてしまっています。「いやぁなんかすみません、特救隊のヘリを落としちゃって……」とヘラヘラと軽いノリで触れたところ、どこか遠慮がちな笑いが場に起こり……。

（まあ、ややウケくらいかな）

なんとか自己紹介を終えました。

さて、次は海上保安庁幹部の方々の自己紹介です。中央の岩並長官から、四役と言われる次長、海上保安監、総務部長……と自己紹介が始まります。やがて私の真正面に座っている制服姿の海上保安官がすっと立ち上がりました。

「羽田特殊救難基地長の岩男勝実です」

真ん前ということもあって、目がばっちり合いました。

ン……？　羽田……？　特殊……。

もう、心臓がひっくり返るどころではありません。口から飛び出すと思いました。

この時の私の気持ち、お察しください。　（つづく）

巡視船「あきつしま」の前で友の会の皆さんと。前列右から３人目が筆者＝昨年３月６日

「特救隊ヘリ落としちゃって…」自己紹介の直後に